









論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏名（本籍）	原田 忠直（日本）
学位の種類	博士（中国研究）
報告番号	乙第30号
学位授与年月日	2019（平成31）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
論文題目	中国における「包」と「市場の秩序」 －農民工の「主観」から読み解く「中 国的なるもの」
審査委員	主査 高橋 五郎  
	副査 佐藤 元彦  
	副査 森 久男  
	副査 大島 一二  

2019（平成31）年2月12日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

1. 本論文の研究目的と論点の概要

本論文は、1990年代初頭から本論文の執筆者によって進められている農民工を対象とした調査と、2010年以降、同人の中心的な研究課題である「包」という一つの経済システムを同じ土俵に載せ、「中国的なるもの」としての「市場の秩序」を読み解こうとしたユニークな研究成果である。

これら二つの、異質とも映る研究課題は、農民工を対象として約20年間、ほぼ定期的に行われてきたアンケート調査を通して明らかとした農民工の「商売を始めたい」という意識を「主観」という概念装置によって結び付けられ生じてくる。つまり、農民工の「主観」を一つの起点として、「包」に基づく「市場の秩序」とはいかなるものであるのか、その諸特徴を提示して、経済論的「中国的なるもの」を浮かび上がらせることが、本論文のフレームワークであり研究目的である。

「商売を始めたい」という農民工の「主観」に着目した点は、本論文の一つの特徴であるが、それを導き出すための方法も、既存の研究スタイルとは一線を画している。本来であれば、農民工に関する先行研究を論じた上で、彼らの「主観」についての論が展開されるべきであろう。しかし、本論文は、このような視座を持つ研究自体存在しないことから、敢えて先行研究を俎上に上げることはせず、自らの調査・研究方法を自省的に捉えながら、農民工の「主観」を掴み取ろうとした。その過程で、「通俗的な言語」で語られている農民工しか発見できなかったという反省を一つの起点として、翻って、研究者としての「主観」が形成されていく執筆者自身の姿を炙り出している。

そして、ハイエク的な「主観」についての理解が明確でなければ、研究対象の「主観」を正確に把握することはできないという主張が展開されるようになる。つまり、「商売を始めたい」という農民工の「主観」とは、低賃金、低学歴、半市民、二等公民などという「通俗的な言語」を通して、自らの研究を自省的に捉えながら削ぎ落とし、その先に、市場経済の現実に耐えうる経済論理を浮かび上がらせようと試みたものといえる。もちろん、この農民工の「主観」によって、農民工の経済論的側面のすべてが語られるわけではない。

むしろ本論文は、何故、農民工は、「商売を始めたい」という「主観」をもち続けているのか、または、もち続けることができるのか、というその背後に潜む諸要因を経済論として明らかにすることに意義を見出しているし、その課題解決の方向性の抽出にほぼ成功している。

もちろん、この農民工の「主観」とは、執筆者が感覚的に得たものではなく、自身が行った農民工に対するヒアリングとアンケート調査に基づいて導き出された結論でもある。本論文では、江西省鷹潭市の学歴水準が異なる4つの高校生を対象に実施したアンケート調査、および浙江省海寧市で実施した農民工（戸主）に対するアンケート調査を通じて、高校生を含む都市で働く農民工の師弟およびその親達が、それぞれ「商売を始めたい」という希望を強く抱く実態が明らかにされる。このような重厚な手段を通じて農民工の意外性を明らかにした例は、ほとんどないといってよい。

さらに、玄田有史の「希望学」を参照とし、彼らが抱く「希望」の実現性について敷衍する。なかでも、まずは彼らが商売を始めるために不可欠な人間関係について、地縁・血縁を基礎とした生得的ネットワークとの関係性、さらに、都市において新たに形成された人間関係について、その交流方法（主に「宴会」という形式）を踏まえた分析が試みられる。

本論文が、農民工が「商売を始めたい」という「主観」をもち続けることができる最大の要因として挙げるのが、「包」という中国社会に組込まれた一つの経済システムである。「包」というシステムが経済的に意義づけられ、農民工の意識の中に存在することによって、彼らの「商売を始めたい」という「主観」は形成され、継続し続けるという結論の一つに至る。

さらに、この結論を起点として、「包」論を展開する点は本論文の立体的構造を明瞭に示すものである。まず、「包」論の先駆者である農業経済学者柏祐賢と一般経済学者加藤弘之のそれぞれの「包」

論が紹介される。両者は、「包」を中国経済の中核的な役割を担っているとしつつも、柏は他人任せで自己努力をしない寄生的なシステムでは企業家精神は育まれない、利潤が分散化し資本蓄積がままならないなどの理由から停滞論を提唱し、加藤は「包」のシステムの下では、人びとの関係性は水平・対等性が堅持され、自由裁量権が最大化されることなどの理由から発展論を展開する。このような真逆な結論が導き出されている点に着目、それぞれの根拠とする要因を批判的に捉え、両者が見落とした論点を再整理し、本論文としての「包」についての再定義がなされる。

なかでも、スクラップ&ビルドの機能（「包」に連なる人びとが絶えずシャッフルされる機能）こそが「包」の中核的なものであると、本論文は主張する。また、柏と加藤は、時代の通俗的な言語（経済の停滞と発展という現象）に囚われすぎたこと、裏を返せば、発展論的思考に縛られ続けたことによって、停滞要因と発展要因を「包」のシステムから意図的に抽出したことに、両者の限界性があると主張する。スクラップ&ビルドの機能を軽視し、人間の自由や社会そのものが再構成される中国社会の重要な特徴を見落としてしまったとする。

しかしその上で、両者の「包」論の持つ経済論的意思を継承しつつ、最終的には、ハイエクの「自生的秩序」論を絡ませながら、「包」とは、「人びとが伝統や習慣のなかから経済の発展と停滞のそれぞれの要因を内包し、利潤と自由を求める積極的「主観」に基づき、スクラップ&ビルドを繰り返す秩序」と再定義する。このような相矛盾する要因を内包し、決して直線的な発展論を描き切れない「包」の特徴こそが、「中国的なるもの」の経済論的視点に於ける「市場の秩序」であることが明らかにされる。

また、農民工の視点からみれば、このような「包」に基づく「市場の秩序」、とくに「包」の構成員が絶えずシャッフルされる状態が、目の前で繰り返されることを通して、彼らの「商売を始めたい」という「主観」が維持され、彼らがたとえ低賃金に基づく低水準な生活を余儀なくされているにも拘わらず、心理的な希望を抱き続け、活力ある社会が形成されているというもう一方の結論が展開される。これらの点は、本論文が持つ意義の一つである。

2. 本論文の独自性と意義

本論の結論とは、上述したように、必ずしも農民工の全体像を浮かび上がらせたものではない。農民工の「商売を始めたい」という「主観」と「包」のシステムを結びつけたことによって、既存研究の大半を占める「貧困問題」、「格差問題」というアプローチでは捉えきれない彼らの姿が描かれるとともに、「包」を通して「脱貧困」、「脱格差」が計られる可能性を論じた道筋は、筆者の独自性ある結論といえる。

改革・開放政策 40 年が過ぎるなかで、現在 2 億 7,000 万に達した農民工を市場経済論的に総括することは重要な研究課題であり、これに取り組んで、上述の成果を挙げたことは評価できよう。

また、柏と加藤の「包」論を継承しつつ、新たにスクラップ&ビルドの視点を加えた上での「包」論の結論（再定義）は、中国社会に於ける経済の現象と構造の特徴を知るための多くの示唆を含むものである。とくに、「包」とは、「一方では、人びとが『利潤』を獲得するためのシステムにほかならないのだが、他方では、格差を是正する機能も内包したシステムであり、矛盾する二面的機能を持ち合わせた極めてユニークなシステム」で、さらにそれがスクラップ&ビルドを通して堅持されているとする点は、日本社会とは異なる「中国的なるもの」を見出す視座と方法を与えるものといえるのではないかと。この点を明らかにしたことは、本論文が持つ意義の核心である。

しかし、資本理論と利潤論の視点からは、そもそも利潤追求と利潤の分配を内包する、または資本の蓄積と資本の分散という機能を内包する「包」の機能を、「市場の秩序」という枠のなかで語ることができるのか、という問題もあるのではないかと。確かに筆者が述べるように「包」はユニークなシステムではあるが、既存の経済学の理論から、どこまでそのユニークさを説明できるのかという点は、本論文にとって、今後の大きな課題となろう。この点、ハイエクの「自生的秩序」論、

「主観的」な研究方法論をさらに追究し、吸収し応用するならば、本論文の主題である「中国的なるもの」としてのユニークな「市場の秩序」論の確立が見通せるはずである。

3. 本審査委員会の結論

2019年1月28日、本審査委員会は本論文についての口頭試問を行い、一致して、本論文を本学大学院中国研究科論文博士学位（博士（中国研究））に相応しいものとした。

ただし、本論文を外部に著書等の形式をもって刊行する場合は、（1）調査関連箇所等を中心に、記述を平易にするよう心がけていただきたい、（2）本論文の主題に関わる「中国的なるもの」があれば「日本的なるもの」「インドネシア的なるもの」もあるといえるので、それらとの抽象的な意味での概念的諸関連の説明を加えてはどうか、等の意見があったことを付記する。

4. 本論文に関連する既発表論文リスト

- 原田忠直「上海市における出稼ぎ労働者の実態」『中京商学論叢』第41巻第1号 中京大学商学会 1994年)
- 「上海における出稼ぎ労働者の行動様式—自営業者を中心に—」(『日本福祉大学研究紀要』第97号日本福祉大学 1997年)
- 「上海における出稼ぎ労働者の定着化」『日中経協ジャーナル』9—10月号 日中経済協力会 1997年)
- 「上海における出稼ぎ自営業者の誕生」(『日中経協ジャーナル』(10月号日中経済協力会 1998年)
- ・西野真由・大島一二「上海市における農村出身集住地域の形成過程とその社会・経済構造—上海市 W 村の事例」(『現代中国』第76号 日本現代中国学会 2002年)
- 「現代中国社会分析試論—三元的社会構造としての民工問題—」(日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第119号 2009年)
- 「中国・民工第2世代(中学生・高校生)の現状認識と将来展望」(日本福祉大学研究紀要『現代と文化』第121号 2010年)
- 「民工と自由」(『日本福祉大学 経済論集』第41号 日本福祉大学経済学会 2010年)
- 「柏史観と「包」の倫理規律」(『日本福祉大学経済論集』第43号日本福祉大学経済学会 2011年)
- 「中国・高校生の「希望」と学力差の関係性について—江西省 T 市及び Y 県の高校生に対するアンケート調査結果より—」(『日本福祉大学経済論集』第44号日本福祉大学経済学会 2012年)
- 「民工(男性)の「希望」とその実現性について—浙江省 H 市における民工に対するアンケート調査結果を中心に—」(『日本福祉大学経済論集』(第46号日本福祉大学経済学会 2013年)
- 「包についての—考察 鄧小平と「擦辺球」(『現代と文化』第127号日本福祉大学福祉社会開発研究所 2013年)
- 「奇妙な宴会—アレントは着席するか?」(『現代と文化』第129号日本福祉大学福祉社会開発研究所 2014年)
- 「躓きの石—確定化への誘惑」『現代と文化』(第129号日本福祉大学福祉社会開発研究所 2014年)
- 「現代中国における「包」と「発展のシェーマ」についての—考察」(『中国社会の基層変化と日中関係の変容』(日本評論社 2014年)

- 「農民工からみた中国社会—ある一枚の写真から読み解く中国社会」(『中国 21』44号愛知大学現代中国学会編、東方書店 2016年)
- 「「包」の「特殊性」から読み解く「中国経済のシェーマ」—柏祐賢と加藤弘之が探し求めた中国研究の核心—(その一)(『ICCS 現代中国学ジャーナル』 第10巻第1号 国際中国学研究センター2017年)

以 上